

検査のパレット

今回は、百日咳についてお話しします。

百日咳とは主にグラム陰性桿菌の百日咳菌が飛沫感染して起こる病気です。7 日間程の潜伏期間の後、2～3 ヶ月を経て回復します。その内訳は風邪様症状の**カタル期**(1～2W)、だんだんと激しい咳に変わり特徴的な咳発作が起きる**痙咳期**(2～3W)、咳発作が弱くなる**回復期**(2～3W 以上)、の 3 段階に分けられます。カタル期の発症初期は、感染力が強いです。

小児の場合 咳発作は夜間が起こりやすく、発作時には嘔吐、チアノーゼ、無呼吸、眼瞼浮腫、結膜充血などの症状が見られ、5 歳未満が多いが生後 6 ヶ月前の乳児の場合は重篤になるおそれがあります。

成人の場合 微熱と激しい咳が数週間続くが、なかには軽症で典型的な発作性の咳を示すことがないため見逃されることもあります。長引く咳の原因のひとつとして注目されています。

検査について

1 百日咳抗体（細菌凝集反応）

基準値 東浜株（ワクチン株）、山口株（流行株）共に 10 倍未満

検査結果の見方

三種混合ワクチン接種の有無によって抗体の上り方に差があるため、一回の採血の抗体検査では明確な診断基準はありません。典型的な症状があり、抗体価が 40 倍以上であれば本症を疑い、160 倍以上であれば可能性が高いと言えます。詳しくは下記に示します。

痙咳期と回復期にそれぞれ採血して、抗体価を調べる方法がよいとされ 4 倍以上の抗体価上昇があれば百日咳と診断されます。

＜一回採血での結果の見方＞

- ① ワクチン未接種又は接種後 6 年～12 年以上の人は、東浜株か山口株のいずれか 40 倍以上。
- ② ワクチン接種者で 10 歳以上の人は、山口株が 40 倍以上か山口/東浜株比が 4 倍以上。
- ③ ワクチン接種者で 10 歳未満の人は、山口株か東浜株のいずれかが 320 倍以上。

2 百日咳抗体精密（E I A 法）

P T（百日咳毒素）抗体と F H A（線維状赤血球凝集素）抗体を測定します。

基準値 P T-IgG、F H A-IgG 共に 10 E U / m l 未満

予防 子供の場合は、生後 3 ヶ月から接種可能な三種混合ワクチンがあるので、保険所や小児科で確認し接種に臨みましょう。

また、成人は長引く咳では一度は百日咳を疑って、早めに受診してください。そのままにしていると他人にうつすことになり注意が必要です。

今回は、敗血症の外注検査についてお話しします。

今後とも検査室をどうぞよろしくお願いします。

文責：弓場 富喜子 監修：石竹 久仁